

六 佛法に厭足なければ

「道は須臾も離るべからず、離るべきは道にあらず」。我等世間の道には常に離れ勝ちであるのに、其ために如來の念力のみは、暫くも我等を離れたまはぬ。眞に道といふ道は、この本願の御慈悲より外にはない。この本願の大道は坦々として砥のやうに、淨土の都に通じて居る。我等は如何して之に向はずに居られやうか。一たび斯道に向うてみれば、茲には何の礙もない。而して無量の恩寵は、花のやうに斯道に咲き匂うてある。喜ばずには居られないでないか。

佛法をあるじとし、世間を客人とせよといへり。佛法のうへより世間のことは、時にしたがひ、相はたらくべきことなり。

今生のことを心に入るほど佛法を心に入たき事にて候と、人申候へば、世間に對様して申事は大様なり。たゞ佛法をふかくよろこぶべしと。又云く。一日くに佛法はたしなみにて候へし。一期とおもへば大儀なりと、人申され候。又云く。大儀なると、思ふは不足なり、人として命はいかほど長く候ても、あかずよろこぶべき事なりと。〔御一代聞書〕

眞宗には精進日といふのがあつて、祖師善知識や、祖先家族の命日を以て之に當て、其日は肴氣を食はず、心身共に謹慎を表し、其恩を偲ぶことになつてある。眞宗の家には大抵之を守つて居る。處が茲に至つて肴好きの人があつて、到底も數多くの精進日を勤めることは出来ない。種々工夫の結果、祖師善知識の御命日は、血が續かぬから堪へて頂くことにし、先祖のは古いから、兄弟のは同輩ぢやからとしても、是非止める譯に行かぬのは、兩親の精進日である。これも二日は辛棒出來かねると、檀那寺へ頼んで兩親の命日を一緒にして貰つた。サア今日こそは、一緒にされた兩親の命日である、云

はゞ二重の精進をしなくてはならぬ。亭主の我儘に奥さんは氣が氣でない。朝飯は先づ精進で済んだ、固より至つて無機嫌である。晝頃になると臺所の隅に行つて、何かコンクやつてゐる。奥さん不審に思つて様子を伺へば、何ぞ圖らん鯉節を削つて居るのぢや。堪りかねた奥さんは「貴朗もあなた、現在父親の命日、母親の命日まで一緒にして貰つて、二重の精進をせねばならぬ筈なのに、鯉節を削るとは何事でございます、お氣でも狂ひましたか……」と云へば、亭主は眞面目になつて「何を云つて居る、物の解らぬにも程がある、よいか能く聞け。晝までは父親の精進、晝からは母親の精進、間に仕切をせいで解るものか、両親は喧嘩をせらるゝぞ」。

折角二親の精進日にまで肴を食ふ、決して感心した話ではない、誠に愼みない横着といはねばならぬが、好きとなつては止められぬと見える。是程に佛法が好きになり、御恩報謝が好きになりたいものである。蓮如上人は仰せられた。

物にあくことはあれども、佛になることゝ、彌陀の御恩を喜ぶことは、あきたる事なし、焼けども失せぬ重寶は南無阿彌陀佛なり。『御一代聞書』
如何にも慙うなくてはならぬ。「佛法に飽足なければ法の不思議を聞く」とは正にこれか。